

# 小児科診療 UP-to-DATE

2014年11月5日放送

## 子どもの成育環境を考える

環境デザイン研究所  
会長 仙田 満

### 成育環境の現状

私はこの40年間、子どもの成育環境、特に遊び環境について考えてきました。結論から言えば、現代の我が国の子どもの成育環境・遊び環境というのは健全なものではなくなっていると考えています。例えば遊び空間という点から言えば、1950年代に比べると1/100というオーダーで縮小しています。子どもを取り巻くその環境は、悪化の循環に陥っており、それは低年齢化し更に深刻ではないかと感じています。

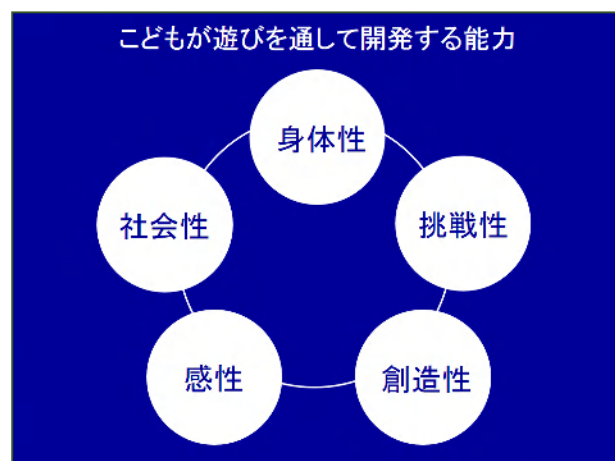
一方、近年の脳科学の変化によって、幼児期におけるさまざまな体験の重要性が益々明らかになっています。子どもは親を選べないのと同様に、生きる場・遊ぶ場を選べません。それは大人の責任です。悪化する遊び環境の中で、あるいは成育環境の中で、どのように子ども達を守っていかかという問題意識が必要ではないかと考えています。

### 遊びを通じて得る能力

私は遊びを通して子ども達が獲得する能力には5つあると考えています。

1つは身体性です。すなわち運動能力・体力です。遊びは自由で自発的です。そういう行動の中で知らず知らずのうちに身体性の能力を獲得していくわけです。

2つ目は社会性です。子どもは遊びを通して社会性を獲得していきますが、アメリカの作家ロバート・フルガムは、1988年に出版した『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本を書いて世界中でベストセラーになりましたが、これは仲良く遊ぶこと、仲直りをするということは、幼稚園時代に遊びを通して学ぶことだと述べています。遊びにおける社会性の開発を一言で述べたものと評価できま



す。

3つ目は感性です。子どもは遊びを通して自然の変化、美しさを発見します。動物を可愛がり、その生死に直面し喜び悲しみ、あるいはどんぐりを集めるとか花を摘むといった採取行動の中で、喜びや満足、感受性、情緒性を育んでいきます。

4つ目は創造性です。子ども達は何かを作りあげることが好きです。積み木遊び、砂遊び、小屋作りのようなアジト遊びも創造的な行為です。イギリスの動物学者デズモンド・モリスは『人間動物園』の中で、若いチンパンジーの実験を通して、遊びは創造性の開発をボーナスとしてもたらずと言っています。

更に5つ目に、遊びは挑戦性、意欲を開発すると考えています。子どもは小さな山があれば登ります。斜面があれば駆け上がり、滑ろうとします。遊びを通してチャレンジする心を育てているのです。

これら5つの能力は、子どもにとって遊びを通して獲得する能力ですし、逆に言えば、遊べない子ども・遊ばない子どもは、これらの能力を開発するチャンスを失ってしまうといっても良いと思います。遊ぶということは、幼児にとって生活そのものであり、成長そのものであると言っても過言ではありません。遊びやすい環境を作ることが大人の責任です。

### 成育環境・遊び環境の分析

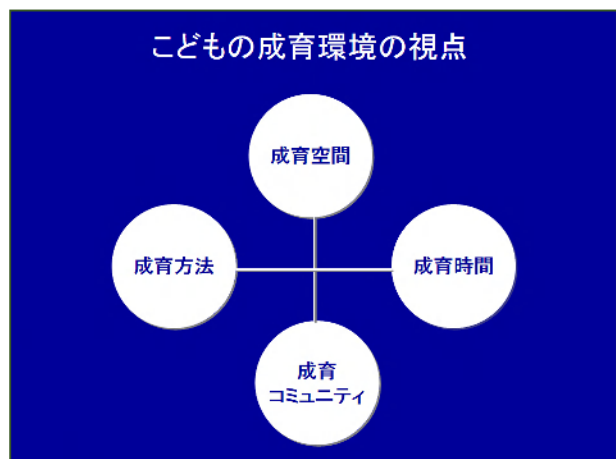
遊び環境は4つの要素で成り立っています。

1つ目は遊び空間です。遊び場と置き換えてもいいと思いますが、遊ぶ場所がなければ、子ども達は遊ぶことができません。

2つ目は、遊び時間です。遊び場があっても遊ぶ時間がなければ遊びません。現代の子ども達はどんどんお稽古事や習い事、あるいはテレビを見る時間に遊び時間を費やしてしまっています。豊かな遊び時間を保証することも大人の役割です。

3つ目は遊び仲間です。遊びのコミュニティといっても良いと思います。遊びには仲間が必要です。仲間から遊びの方法を教えてもらいます。現代は少子化の影響もあり、兄弟が少ないですが、多くの友達と遊べる機会を大人は用意しなければならないと思います。

4つ目は遊びの方法です。遊びの方法は遊び環境に大きな影響を与えます。遊び方法を知らなければ遊びは発展していきません。手遊びや自然遊び、人と人が直接遊びを展開できる方法が少なくなっています。テレビや映像メディアを見る事が多くなっていますが、遊びの方法が貧困になっていると言えると思います。



このように遊び環境を大きく「遊び空間」「遊び時間」「遊び仲間」「遊び方法」という4つの要素でみていくことが重要で、それは成育環境を「成育空間」「成育時間」「成育コミュニティ」「成育方法」と4つの事象で見ていくことと同様です。その環境の豊かさを確認し確保していくことが必要だと考えます。

## 環境要因が与える影響

現代の子ども達の問題で言うと、遊びの方法についてみてみましょう。テレビという情報環境による変化の影響は極めて高いと思われます。わが国では子どもが電子メディアに接する時間は長時間化する傾向にあります。幼児期あるいは児童期においても、このテレビを1日4時間という長い時間視聴しているという報告がされています。そうすることによって、子ども時代に獲得しなければならない能力を獲得できなくなってしまうています。空間・方法・時間・コミュニティが相互に影響しあいながら、現代は少し悪化に向かっていきます。子どもが遊びの醍醐味を体験する機会を失い、遊び意欲を減退しているところもあります。子どもを元気にするためには、この4つの要素による遊び環境の視点を理解して、総合的に横断的に子どもの遊び環境・体験の確保に取り組まなければならないと思っています。

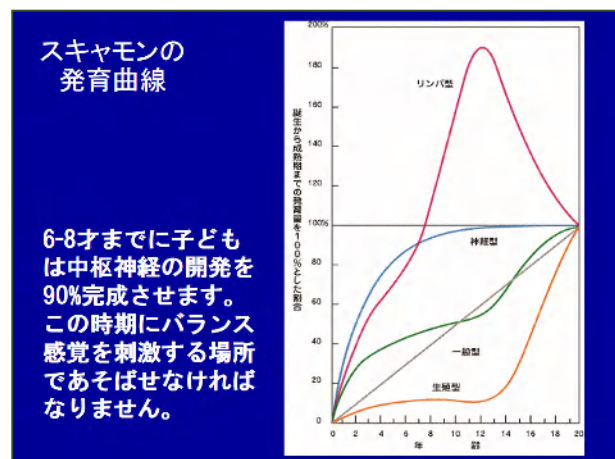
幼児期は人生の中で最も重要と考えています。最近の脳科学の進歩によって中枢神経の発達は8歳頃までに90%完成されると報告されています。躓いて転んだときに、反射的に手をつき身体を支えるのは中枢神経によるものと考えていますが、この身体を巧みに動かす力というのは、ほぼ幼児期に決まってしまうと考えられています。

事実、私が幼稚園の園庭と運動能力の関係性の調査をしますと、例えば片足ケンケン跳びの能力と園庭の環境は強い相関関係があると考えています。片足ケンケン跳びというのは、バランス感覚や持久力ですが、園によって10倍くらい差があります。やはり、バランス感覚や持久力など、そういう能力が高い園のほとんどは、山や丘、斜面がその比較的広い園内にあります。このように、中枢神経の発達に適した園というのは、そこで子ども達の気づきや発見というものが育まれるのではないかと考えています。

幼児期の生活環境によって育まれる能力は、特定の年齢期に開発され、その後の長い人生に多くの影響を与えます。そういう意味において、幼児期の遊び環境・成育環境は極めて重要であると考えています。

もう1つ、現代の子ども達の問題として、大地との関わり合いを失いつつあると言っても良いと思います。最も重要な幼児期において、自動車やベビーカーと呼ばれるライドにいつも乗せられて、自分の足で歩かせようとしていないということは、とても大きな問題であると考えています。自分の足で歩くことによって、地上面の花や虫、さまざまな事に興味をそそられ、発見し、身体的な運動能力を開発していきます。

アメリカのヘルドとハインは2匹の子猫の実験を通して視覚と身体性の開発の環境を明らかにしました。いくら視覚的な学習をしても身体的な開発には寄与しないことを示しました。今わが国の子ども達は多くの時間をITメディアの接触に消費しています。それはある意味で、運動能力の開発であるとか、さまざまな能力の開発、特に小さな子ども達にとって3時間以上テレビを見ていることは、コミュニケーション能力の低下に大きな影響があるとも言われています。アメリ



カの小児科学会では、ITメディアとの接触が子どもの健康障害を引き起こす危険性を持っているとも指摘していますが、子どもの生活を、あるべき姿に戻していかないと、人間として極めて困難な一生を引き受けることになると思われます。そういう意味で、子どもの成育環境というのはとても重要です。

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>